

第一二二話

頼光朝臣自栴花女伝弓矢事

『前太平記』上 卷第十八 三六九頁から三七一頁より

こうして三四日を過ごしたが、左馬権頭殿の身の周りでは、それほどの御慶事もなかったので、「それでは伴別当（伴廉平）が嘘を申したのだ」と言い合っていたが、五日と申し上げる午の刻ほどに、左馬権頭殿はひどく眠気に襲われたということで、色々行って目を御醒ましになるが、まったく眠気は晴れず、そのまま御眠りになった夢の中で、天から光をまとったような者下りてきて空中に立っている。左馬権頭殿は不審に思い御覧になると、見目の整った美しい女性である。すぐに階下にうずくまり、「どのような人であられると、どのような用事でこの場に御来臨になられるのか」とお尋ねになったところ、その美女が答えて言うことには、

「私は楚の恭王_(壹)に仕えた大夫_(貳)養由基_(参)の娘で、栴花女という者である。さて、私の父の由基は、弓術を嗜んでいた。ある時、大聖_(肆)文殊菩薩_(伍)は、由基に御託宣になり『お前は私の化身である。私はお前に一つの徳を教えよう』と言って、文殊自ら二つの眼を取って、二つの鍬_(陸)を御作りになる。これを『水破兵破』と名付ける。また、五台山_(漆)の麓に二つの頭を持つ大蛇がいる。（大蛇は？）信楽慚愧の衣の糸_(捌)を八尺五寸の弦によりつけて、一張の弓を作って、こ

れを『雷上動』と言う。多羅葉_(玖)を集めて直垂を作り、お着せになる。すぐに例

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

の弓矢をもって、柳の葉を的として射る術をお教えになる。それゆえ由基は、百歩もある距離の間を隔て、柳の葉を射ると、百発百中となる。ある時、晋と楚とが鄢陵 (拾) というところで戦ったが、由基は兜の中にうずくまって敵を射る。盾七枚を射通す。その強い精鋭の軍はこのようになった (倒された)。天下無双の名を表し、弓を取れば雁の群れの列を乱し、空飛ぶ鳥もすぐさま地に落ちた。しかし由基は、その年が七百歳をこえて、きっとすぐに寿命が終わろうとする時、『広く天下を見渡すと、弓矢を継承すべき人がいない。娘であるのでお前に授けよう』と仰って、私に渡しておいて亡くなってしまった。今私もまた、きっと寿命を迎えようとする。また継承すべき弟子もないので、嘆かわしいことに思ったが、大聖文殊がまた私にお告げになったことには、『お前の伝え持つ弓矢を継承すべき者は日本にいる。名を源頼光という。彼もまた私の化身で、幼名を文殊と言った。これはこのめぐり合わせ (→転生) があるためである。その才は、まさに弓矢を伝えるべき者である。急いで日本に渡って授けよ』と仰った。私は歓喜する事この上なく、すぐにこの地に来て足元に (地上を) 眺める。この弓矢を授けよう」と言って、水破兵破、雷上動、並びにその直垂を与えて、また天井に飛び去って行くのを御覧になって、すぐに夢は覚めてしまう。左馬権頭殿は、不思議に思いながら目を開き御覧になると、夢中のお示しが少しも食い違ふことなく、弓矢・直垂が側にある。左馬権頭殿のご歓喜は格別であり、「これこそ別当が占ったことである」と言って、別当には色々と引出物を送られた。

さて、頼光はこれを手に入れて、直垂は「葉早黄色」と名付け、いつもこれを身

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

につけ、弓矢の恩恵を施しなさんと、まったく養由基の腕に引けを取らない。すぐにこの重宝は、子孫がこれを伝え保持して、妖鬼をおさえ、強敵を成敗し、一族の武の威光、天下の守護となったのだった。

注釈

※壺・楚の恭王……中国春秋時代の楚の、共王のことか。

※貳・大夫……中国の周代から春秋戦国時代にかけての身分の一つ。領地を持った貴族。

※参・養由基……楚の共王に仕えた武将。弓の名人。

※肆・大聖……高位の菩薩のこと。

※伍・文殊菩薩……仏の智慧を象徴する菩薩。

※陸・鏑……矢の先につける道具。

※漆・五台山……中国山西省東北部の五台県の靈山。仏教では文殊菩薩の聖地とされる。

※捌・信楽慚愧の衣の糸……「信楽」は仏教の言葉で「教えを信じ願うこと」。「慚愧」は「恥じ入ること」の意味であるが、それでできた衣の糸というのはよくわからない。今後の調査予定。

※玖・多羅葉……モチノキ科モチノキ属の常緑高木。葉の裏面を傷つけると文字が書けるため、日本では経文の書写に用いたりした。

※拾・エン陵……中国河南省エン陵県のこと。楚はここで晋と戦い、養由基が活躍したが、共王が負傷したことで軍が動揺し戦には敗れた。

この話で面白いのは、頼光が文殊菩薩の化身と語られていること。これはおそらく、多田神社に祀られる文殊菩薩像が頼光により寄進されたことが由来となっている気がするのですが、それだとしても、かなり特殊な設定ですね。作者の創作か、もしくは江戸時代にはそういう伝承があったのでしょうか。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2019/6/27

改訂：2021/3
海熊童子